

Emily Dickinson の詩における二人称代名詞の使用について

岡部未希^{†1}

概要：本研究では、アメリカの詩人 Emily Dickinson の詩に対してトピックモデリングを実行し、you と thou がどのような使い分けをされているのかを考察する。まず英語における二人称代名詞の歴史的背景を概観し、thou は宗教的な場面で用いられるだけでなく、親称の thou という昔の用法で使っている場合があるのではないかと仮説を立てる。次に、MALLET を用いて LDA に基づくトピックモデリングを実行し、作品内に潜在するトピックとそれを構成する語群を抽出する。そして、実際の詩を確認しながら考察し、thou に関してはこの仮説が正しいこと、さらに手紙が主題の詩で you が使われやすいことを示す。

キーワード：Emily Dickinson, トピックモデリング, 二人称代名詞

1. はじめに

Emily Dickinson (1830-86) はアメリカを代表する詩人の一人である。自然、愛、死、永遠、神といった、故郷ニューイングランドでは伝統的なテーマを用い、生涯に 1785 編の詩を書き上げた。詩 1 編の長さが比較的短く、ピリオド (.) やコンマ (,) の代わりにダッシュ (—) を多用することが Dickinson の詩の特徴としてよく挙げられる。また、全体の内約半数の詩では主に I が用いられ、自分語りという形で書かれていることが多い。

一方、二人称代名詞に着目すると、現代英語で一般的な you と、今はほぼ廃れてしまった thou の両方が同じくらい使われている。この二人称代名詞の使い分けは、詩のテーマや意味にどの程度関係しているのだろうか。そこで、本研究では、トピックモデリングを実行して you や thou を含むトピックを推定し、それぞれのトピックがどのような語で構成されているのかを分析する。その上で、各代名詞を含む詩はどのようなテーマを持ちやすいのかを考察していきたい。

2. 二人称代名詞の歴史的背景

2.1 古英語から現代英語までの歴史的変化

古英語において二人称代名詞単数と複数を使い分けられていた。すなわち、þū (今日の thou) は単数を表し、gē (今日の you で、ここでの g は y に相当する音だったという) は複数を表していたわけである。しかし、中英語後期からこの区別が崩れ、「敬意」を示すためにどの相手にも you を使うようになり、これが一般化して thou は衰退することとなった。現在では、thou が使用されるのは、聖書や方言などのごく限られた場面であり、このため、thou の方が丁寧であると勘違いしている人も多い (家入, 2007)。また、詩に使われることも多いため、19 世紀の作品では thou は詩語 (poetic diction) ともいわれている (富樫他, 2014)。

2.2 Shakespeare 作品における二人称代名詞

William Shakespeare (1564-1616) が活躍した初期近代英語期では、敬称の you と親称の thou として、両者は区別して使われていた。たとえば、身分によって使用する呼称が異なり、上層階級同士では互いに you を用い、下層階級同士では thou を用いた。目上の者に対しては you、目下のものに対しては thou を用いた。また、女性間では階級を問わず you が一般的に使われていた。

さらに、心的態度によって通常使用する呼称が変化する場合もある。たとえば、通常 thou を使っていた人に対して敬意や皮肉を表すために you を使うことがあった。逆に、通常 you を使っていた人に対して thou を使う場合は、親密さや怒りなどを表した (荒木・宇賀治, 1984)。

もちろん、Dickinson が生きていた 19 世紀の時点では thou の用法は廃れてしまっていたわけだが、Dickinson は生前、Shakespeare の大ファンで、彼女の作品は少なからずその影響を受けている (Finnerty, 2008)。したがって、Dickinson の二人称代名詞の使い分けも Shakespeare 作品の影響という可能性があるのではないかと。すなわち、宗教的な意味や堅苦しい雰囲気を出すために詩語として thou を用いただけでなく、Shakespeare の時代のように、詩に出てくる人物の関係性や感情を表すために you と thou を使い分けていたのではないだろうか。

この疑問を確かめるために、本研究では Dickinson 作品に対してトピックモデリングを行う。そして、you, thou を含むトピックはどのような語で構成され、どんなトピックを形成しているのかを考察し、両者の違いを明らかにする。

3. 分析対象

本研究では、Thomas H. Johnson が編集した *The Complete Poems of Emily Dickinson* に収録されている全 1785 編[a]の

^{†1} 大阪大学大学院 言語文化研究科
Osaka University Graduate School of Language and Culture Studies

a) 詩集内での通し番号は 1 から 1775 までだが、文体が少し異なるものを

同じ番号の ver. 1, ver.2... という形で収録されているものがあつた (216, 494, 824, 1213, 1282, 1357, 1358, 1366, 1627)。そのため、それらの別バージョンも全て各 1 編とみなし、合計 1785 編と数えている。

詩を分析対象とする。4行4連～6連構成の詩が多く、長い詩では4行10連構成、最も短い詩は2行1連構成になっている。

| 詩人 | 作品数 | 異なり語数 | 総語数 |
|-----------|------|--------|--------|
| Dickinson | 1785 | 74,155 | 95,799 |

表 1 分析対象の基本情報

また、Dickinson が詩で使用している二人称代名詞の頻度は表 2 の通りである。Thou 系列よりも you 系列の単語の方が出現頻度が高いものの、その差はそれほど大きいとは言えない。

| You 系列 | 頻度 | Thou 系列 | 頻度 |
|----------|-----|----------|-----|
| you | 407 | thou | 115 |
| your | 119 | thy | 78 |
| | | thee | 217 |
| yours | 10 | thine | 24 |
| yourself | 9 | thysself | 10 |
| 計 | 545 | 計 | 444 |

表 2 Dickinson 作品における二人称代名詞の頻度

4. トピックモデリング

4.1 トピックモデルとは

トピックモデルとは、様々なデータに隠れた潜在的なトピック（話題、カテゴリーなどの大雑把な意味）を推定するモデルのことである。Blei et al. (2003) が考案した LDA (Latent Dirichlet Allocation, 潜在的ディリクレ配分法) に基づくトピックモデルは、文書中で共起する語句は同じトピックを持ちやすく、文書は複数のトピックが集まって構成されている、という前提で、文書データからトピックを推定する。そして、各トピックは文書で共起する語群という形でコーパスから自動的に抽出される。そのため、各トピックのラベリングは語群からユーザーが独自で解釈しなければならない。

4.2 先行研究：詩へのトピックモデリングの実行例

トピックモデリングは様々な文学データに応用されている。中でも Navarro-Colorado (2018) は、16 世紀から 17 世紀に 52 人の詩人によって書かれた 5078 編のスペイン語ソネットのコーパス（総語数 476,165、総異なり語数 28,599）にトピックモデリングを実行した。その結果、LDA トピックが詩のテーマや主題を抽出できるだけでなく、2 種類のモチーフと言うべきものをトピックとして抽出できることを発見した。1 つ目は音韻モチーフ (phonetic motifs) で、そのトピックを構成する語群は類似した音の単語を含んで

いる。2 つ目は意味的なモチーフ (semantic motifs) である。詩人は、あるテーマを表現するのに、別の領域の言葉、つまり比喩的な言葉を使うことが多い。LDA トピックは、中でも、詩人が繰り返し用いている比喩的なモチーフを取り出すことができる。たとえば、海というモチーフは、愛、倫理、宗教や英雄的な主題を表し、音楽は主に愛のモチーフであった。

ソネットも比較的短い詩 (14 行, 1 編あたり約 85-95 語) だが、Navarro-Colorado (2018) は詩を行ごと・連ごとの小さい単位に区切るよりも、詩全体を使用する方がより正確なトピックを抽出できる、と主張している。また、見出し語変換 (lemmatization) すると音韻などの重要な詩的要素が失われてしまうため、stop-words でフィルターをかけることを推奨している。

4.3 データの前処理とトピックモデリングの実行

本分析では、機械学習ツールキット MALLET を用いて LDA を実行した。先行研究を参考に、詩は全文を用い、見出し語変換は行っていない。その代わりに、機能語や you・thou 以外の代名詞を stop-words list に入れてフィルタリングした。

また、トピック数はユーザーが指定するのだが、設定があまりに少ないと広範囲に及ぶ抽象的なトピックが抽出されてしまい、解釈が難しい。一方、トピック数を多く設定すると、具体的なトピックが多くなるが、細分化されすぎて逆に解釈が困難になることもある。最適なトピック数はコーパスの規模や分析の目的によって異なるため、これではなければならないという解は存在しない。そこで、本分析では生成するトピック数を 40 に設定した。

4.4 結果

表 3 は、上記の前処理を経てトピックモデリングを行った結果得られた、0 から 39 までの 40 個のトピックと各トピックを構成する語群を示している。キーワードはそのトピックへの word-weight が高い順に並んでいる。4.1 で述べた通り、これらが何に関連したトピックなのかは表中のキーワードから推測していく必要がある。

たとえば、40 個の内最も大規模なトピック 21 は、heaven, god, soul などの語からキリスト教に関するトピックだということが分かる。また、トピック 30 は sun, night, day, noon などを含んでいるため、時に関するトピックである。トピック 11 は death, die, grave, pain などから死に関するトピックだと推測できるものの、同じトピック内に love も上位項目に含まれている。

二人称代名詞に着目すると、トピック 3 は you 系列の代名詞を中心にして構成され (図 1 参照)、トピック 23 は thou 系列中心に構成されている (図 2 参照) ことがわかる。また、比較的小規模なトピック 7 を構成する主要単語にも

you が含まれている。ただし、これ以降は二人称代名詞が最上位項目に入っているトピック 3 とトピック 23 を中心に考察していく。

表 3 トピックを構成する語群，上位項目

| トピック | キーワード |
|------|--|
| 0 | plush ourself familiar madness time's girls extremity fool syllables plucked mouldering born |
| 1 | tree tim country apple sir brave solemn story breakfast woods fell cry |
| 2 | soul spirit flesh stands hope trust immortality mutual body subtle conviction route |
| 3 | you your i'm heart ah sir you'll find true buy blame eyes |
| 4 | sea land brook water blue past drink seas purple bold dry thirst |
| 5 | stately learned fingers opposite speech boat puzzled guessed playing pencil pearl softly |
| 6 | cup function proud lip liquor ne'er sought smaller spirit swing behold fleece |
| 7 | eden barefoot won't earl you lonesome father smile sees boys you'd tied |
| 8 | abroad rain cattle envy showed flung hands drop brooms eaves childhood's needless |
| 9 | heart faith nought forgot lead faithful departed remembered care bell breaking gathered |
| 10 | boy mooses guess tun miracle hair wiser clothes mend mourner ability perdition |
| 11 | death love life die grave pain live dying dead thing left heart |
| 12 | read fashioned triumph sweeter chariots boon hath advance kingdom seraphic |
| 13 | years fire thousand turns cheer blush months glowing mountains note dissolve suns |
| 14 | father career mansions meat wears frequently son brown industry coat travels pungent |
| 15 | gain man distance hope poverty blame earn riches grace fail slow pause |
| 16 | bye outer spider visitor fine revere picture adored sown claim called force |
| 17 | bells victory faith earth defeat obtained repose circumference saved loved surrendered daisy |
| 18 | block leaves deeper crease begins shown conclusion elude gilded inferred antiquated |
| 19 | bird spring robin snow march winds tree tune april nest birds children |

| | |
|----|--|
| 20 | crumb beggar table food hungry bread grown curious luxury lonely looked phoebe |
| 21 | heaven day till time face god make home eyes mind door soul |
| 22 | busy departing snake hated red reprieve brake oil carts beds lamp fields |
| 23 | thou thy oh art thine sweet hast o'er bride pray lord thyself |
| 24 | summer bee flower rose flowers bees butterfly show bloom june tune lie |
| 25 | knew looked recollect grew dropped universe freight ago groped hoped blank plank |
| 26 | match who's parties excuse sneer flint fast ago reasons ancient creep astir |
| 27 | bone height memory conjecture confronting superior glittering polar adieu angel recognition |
| 28 | view carpenter wound lean bore props garment nail trees combined trudging dirk |
| 29 | nature god man friend human stranger deity soul afraid suffice fear foot |
| 30 | sun night day house morning feet light noon sky birds nature face |
| 31 | return knowing tomorrow uncertain joy meadow precisely bright good shorter bobolink delight |
| 32 | reveal poet strength needle blaze secret forge furrow stitches guard heavy seldom |
| 33 | wind sea wild thunder nights arm push tight visited caught noons music |
| 34 | patience forces believes ecstasy won opposing poets pageant uttered enamor audience constant |
| 35 | doth laid host guest grief hath moon countenance invited barn boldly juggler |
| 36 | teach book alike skill supreme wouldn't philosopher abode reportless slipping inscrutable |
| 37 | runs affliction floss innocent seal doors cover abyss homes shows store rope |
| 38 | satin wood safe untouched pity roof tragedy fled alabaster general preferred aisle |
| 39 | liberty fraud danger visit moments gratitude dungeons soul's buried free sets chase |



図 1 トピック 3 の word cloud



図 2 トピック 23 の word cloud

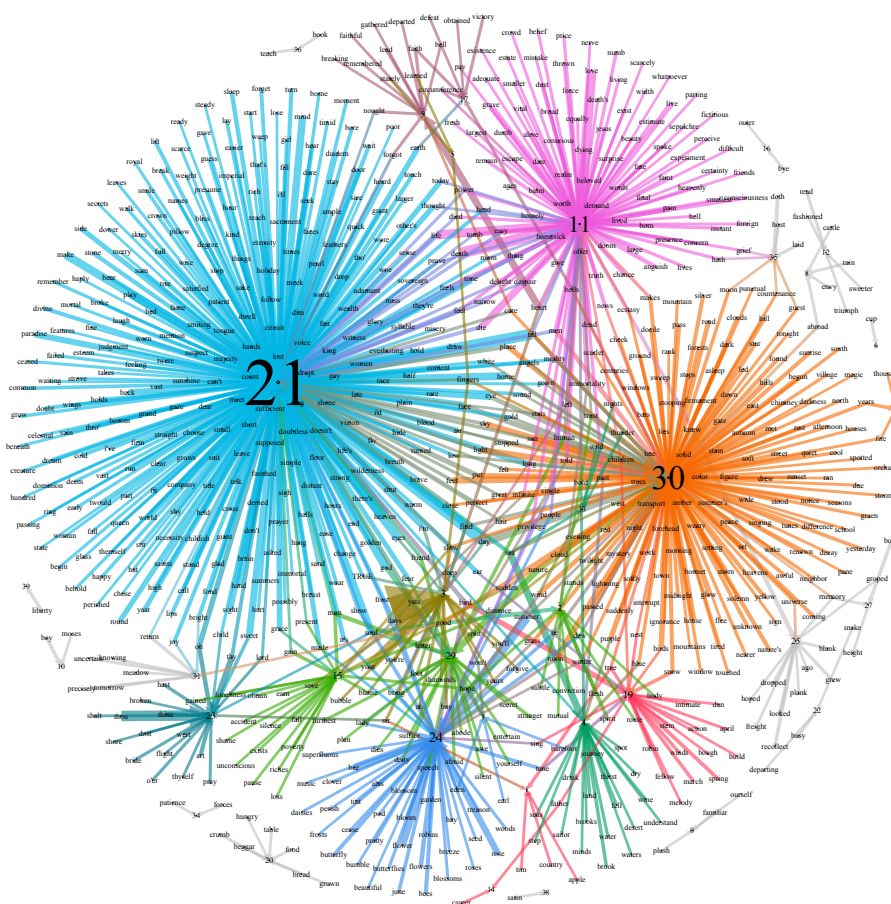


図 3 トピックとキーワードの関係性

図 3 は視覚化アプリケーション Gephi を用いて作成した、各トピックとそれを構成するキーワードの関係性を示したネットワークグラフである。40 個のトピックと、それらと関連性の強い単語計 973 項目（トピック 1 つ以上に対する word-weight が 7 以上のもの）を表示しており、トピックと単語との結びつきが強いほど、ノード間を結ぶエッジの幅

が大きくなっている。図から、いくつかの語が複数のトピックに属していることを確認できるだろう。また、大規模なトピックは word-weight の大きな語をたくさん含んでおり、さらにそれらの単語は他のトピックとも繋がっていることが分かる。小規模なトピックは word-weight の大きな語が少なく、より外縁に配置されている。

ああ 天の主であるあなた
父であり子であるあなたの 花嫁
聖霊の花嫁

他の婚約は解消し
意志による結婚は朽ちるしかない
ただこの指輪を持つ者のみが
死を征服するのだ

第一連で、生前か死後かは分からないが、語り手は三位一体である神 (thou, Celestial Host) の花嫁になる。そのため、第二連で語られるように、他の人との婚約関係は解消する。また、「この人と結婚したい」と思っている普通の結婚はいつか朽ちてしまうが、神との結婚は永遠に続く。その結婚指輪をはめたときから、花嫁は死 (Mortality) を超越した不滅の (Immortal) 存在になるのである。このように、天の主との結婚という極めて宗教的な場面を扱う詩では、上記の例のように you ではなく thou が使われている。

5.2 親愛の意味をもつ thou

Thou が出現するのは宗教的な場面や堅苦しい雰囲気が漂う詩だけではない。トピック 23 を構成する主要単語の一つには愛に関する単語 sweet が存在し、恋愛の文脈でこの代名詞が使われることが示唆されている。たとえば、[106[e)] “The Daisy follows soft the Sun —” では、語り手を花にたとえ、語り手が恋をする相手を太陽にたとえて thou で呼びかけている。

The Daisy follows soft the Sun —
And when his golden walk is done —
Sits shyly at his feet —
He — waking — finds the flower there —
Wherefore — Marauder — art thou here?
Because, Sir, love is sweet!

We are the Flower — Thou the Sun!
Forgive us, if as days decline —
We nearer steal to Thee!
Enamored of the parting West —
The peace — the flight — the Amethyst —
Night's possibility!

雛菊は そっと太陽のあとを追う
そして 太陽がその黄金の歩みを止めると
恥ずかしげに足元に座る
太陽は目を覚まし 花をその場に見つける

盗人よ なぜこんな所にいるのか?
なぜって 愛とは素晴らしいことなのです!

私は花で あなたは太陽!
お許してください 陽が沈むにつれ
少しずつあなたへと忍び寄っても!
去りゆく西の空
平穩——飛翔——紫水晶——
夜の可能性に 心奪われたからなのです!

武田(1988)によると、ディキンソンはしばしば自分を Daisy (雛菊) にたとえ、大きな存在である相手に対する、自分のささやかさや慎ましさを示した。この詩でも、地上に生える小さな雛菊と、天にあり地上を照らす大きな太陽の両者は非常に対照的である。

第一連で、雛菊は太陽を追いかけており、太陽は東から西へ歩き終わって日暮れになるとようやく、足元に恥ずかしげに座る雛菊を見つける。すると太陽は雛菊に対し何故ここにいるのかと問いかける。雛菊は慎ましい雰囲気だが、大胆にもこの大きな太陽の心を奪おうとやってきたので、太陽から Marauder (略奪者) と呼びかけられるわけである。ここでの太陽の発言は、Wherefore, art thou, という古語が使われているために、厳かな口調だと想像できる。そして、その呼びかけに対し、だって愛って素敵でしょ! と答える雛菊はいかにも可愛らしい口調である。

第二連では、語り手は雛菊で、語り手が恋する相手は太陽にたとえられている。雛菊にたとえられるものが We と複数形になっているのは、天にたった一つしかない太陽を多くの人が見上げるように、一人の thou に憧れている人が語り手を含め複数いるという示唆だろう。語り手たちは第一連の雛菊のように、日が暮れるにつれ忍び足で thou に近寄っていく。何故かという、夜になればあの人に近づけるのではないかという可能性に魅惑されているからである。

この詩は全体的に荘厳な雰囲気が漂っている詩ではない。神や聖霊が出てくるわけでもない。小さく控えめな存在が大きな存在に憧れてそっと近づこうとする、無邪気な恋愛詩である。そこで憧れの相手に you ではなく thou と呼びかけているのは何故だろうか。一つには、詩全体で代名詞を統一させる目的が考えられる。太陽の発言が古語で綴られていることから、その太陽にたとえられる人に対しても thou を用いることで、その人が語り手にとって非常に大きな存在であることが示唆される。一方、題材が堅いものではないことから、真面目な雰囲気を出すためではなく、Shakespeare の時代のように thou を使うことで親愛を表現しようとした、という可能性も考えられる。それと同じような用法は、[908[f)] “‘Tis Sunrise — Little Maid — Hast Thou”

e) 太字は著者によるもの。和訳は武田 (1988) を参考にした。

f) 太字は著者によるもの。和訳は谷岡 (1987)。

でも見受けられる。

'Tis Sunrise — Little **Maid** — Hast **Thou**
No Station in the Day?

'Twas not **thy** wont, to hinder so —
Retrieve **thine** industry —

'Tis Noon — My little **Maid** —
Alas — and art **thou** sleeping yet?
The Lily — waiting to be Wed —
The Bee — Hast **thou** forgot?

My little **Maid** — 'Tis Night — Alas
That Night should be to **thee**
Instead of Morning — Had'st **thou** broached
Thy little Plan to Die —
Dissuade **thee**, if I could not, **Sweet**,
I might have aided — **thee** —

日の出ですよ、お嬢さん
朝はあなたの出番じゃ無いって言うの？
そんなにぐずぐずするなんて—以前のあなたらしくもない
勤勉さを取り戻しなさいよ

正午ですよ、お嬢さん
おや、まだ眠っているの？
結婚するのを待っている百合のこと
蜜蜂のこと—忘れてしまったの？

お嬢さん、夜ですよ
やれやれ、朝でなくまた夜があなたにやって来たなんて—
死にたいなんて詰まらない事考えていたのだったら
そんな馬鹿な事やめなさいと
説得できないまでも
力になってあげる事ぐらいはできたのに—

この詩では全体を通して My little Maid (私のちっちゃなお嬢さん) に対し **thou** で呼びかけている。これは Shakespeare の時代に使われていた、目下の者に対して用いる親称の **thou** である。語り手は一日中 little Maid に声をかけるが、勤勉なはずの彼女はいつまでたっても起きてこない。第三連になってようやく、その愛しい存在がもう死んでしまっていることに気づく。最後の場面ではもしそのことを話してくれていたなら、と嘆くことになる。

他にも明らかに宗教的なテーマを扱っていない詩で **thou**

が出てくることがあるが、これは親称の **thou** だとすれば納得できる。次の[92[g]] “My friend must be a Bird —”は、語り手が友人を色々なものにとえる詩である。

My friend must be a Bird —
Because it flies!
Mortal, my friend must be,
Because it dies!
Barbs has it, like a Bee!
Ah, curious friend!
Thou puzzlest me!

私の友達ってきっと小鳥よ—
飛ぶんですもの！
私の友達ってきっと人間よ
死ぬんですもの！
たくさん針があつて蜜蜂みたい！
ああ 変な友達！
頭がこんがらがっちゃう！

語り手の友人は鳥が空を飛ぶように快活な心を持ち、まるで神のように思えるが最後には死ぬのできっと人間で、蜜蜂が針を刺すようにいくつも辛辣なことを言う。そんな友人に対して、親しみを込めて **thou** と呼ぶのである。

このように、トピック 23 の考察を進める中で、**thou** は主に宗教的なテーマの詩で用いられるが、一部の詩では、昔使われていたような親愛を示す用法として使われていることが判明した。次の 5.3 節では、**you** が中心となっているトピック 3 について、現段階でわかっていることを述べる。

5.3 手紙が主題の詩における **you**

前述の通り、図 1 は図 2 よりもまとまりがなく、トピック 3 は解釈が非常に難しい。しかし、よく見ると、**letter**, **message**, **dear** (価値の高い、愛しい、という意味もあるが、ここでは手紙における書き出しの挨拶の意味) など、手紙に関する単語が複数出ている。このような手紙や伝言が主題の詩で **thou** が使われているものはほとんどない。さらに、**fingers**, **eyes**, **foot** など、身体部位の言葉も含まれている。これは、たとえば[494[h]] “Going to Him! Happy letter!”で、擬人化された手紙の振る舞いや、書き手 (語り手) の行動が、それらの身体部位の単語を使って表現されている。以下に示すのは、三連で構成されたその詩の第一連である。

Going to Him! Happy **letter**!
Tell Him —

が存在する。そのため、どんな種類の手紙なのか (恋文、季節の便りなど) は読み手に解釈が委ねられている。

g) 太字は著者によるもの。和訳は谷岡 (1987) を参考にした。
h) 太字は著者によるもの。和訳は武田 (1988) を参考にした。手紙の送り先が Him になっているものと Her になっているもの、二種類のバージョン

Tell Him the page I didn't write —
Tell Him — I only said the Syntax —
And left the Verb and the pronoun out —
Tell Him just how the **fingers** hurried —
Then — how they waded — slow — slow —
And then **you** wished **you** had **eyes** in **your** pages —
So **you** could see what moved them so —

あの人のもとにいくなんて！幸せな手紙なこと！
あの人に言って—
私の書かなかったページのことを あの人に言って—
書いたのはただの文の骨格だけだと—あの人に言って—
動詞と代名詞は書かずにいたと—
指がどんなに急いだかと あの人に言って—
それから—どんなにゆるゆる—やっ指が動いたかと—
そしてお前は何が指をそう動かしたのか見るために—
ページに眼がついていればと願ったと—

また、Dickinson の詩集の中には、神様に向かって手紙を書くという詩もあるのだが、面白いことに、この詩には **thou** ではなく **you** が使われている。全二連構成の[487[i]] “You love the Lord — you cannot see —” の第一連は、次のように書かれている。

You love the Lord — you cannot see —
You write Him — every day —
A little note — when **you** awake —
And further in the Day.

あなたは神を愛し—姿は見えないが—
彼に手紙を書く—毎日のように—
起きぬけには—小さなメモを—
日中にはたっぷりと

「あなた」が Lord を指していない場合でも、5.1 節の[1539] “Now I lay thee down to Sleep —” のように **thou** を使用する場合がある。したがって、ここであえて **you** が使われているのは、手紙という主題が大きく関わっているのではないだろうか。

5.4 感嘆詞

最後に、2 つのトピックの共通点としては、図 1 と図 2 を見ると、どちらのトピックにも感嘆詞が含まれていることがわかる。たとえば、両方に呼びかけの **sir** が含まれている。また、**you** 系列の代名詞は **ah** と結びつきやすく、**thou** 系列の代名詞は **oh** と結びつきやすい。この違いはそれぞれ

i) 太字は著者によるもの。和訳は著者が作成した。第二連に Letter が含まれている。An Ample Letter — How you miss — / And would delight to see — /

の代名詞が出現する詩のテーマの違いによるものと推測できるが、実際に何が原因なのかは解明することができなかったため、今後の課題としたい。

6. おわりに

本研究では、アメリカの詩人 Emily Dickinson の詩に対してトピックモデリングを実行し、**you** と **thou** がどのような使い分けをされているのかを考察した。まず英語における二人称代名詞の歴史的背景を概観し、**thou** は現代では聖書等で使われること、また、Shakespeare の時代では敬称の **you**・親称の **thou** として区別して使われていたことを示した。その上で、Dickinson は Shakespeare 作品を愛読していたことから、二人称代名詞を昔の用法で使っている場合があるのではないかと仮説を立てた。次に、MALLET を用いて LDA に基づくトピックモデリングを実行し、作品内に潜在するトピックとそれを構成する語群を抽出した。そして、得られたデータをもとに実際の詩を確認しながら考察したところ、**thou** は主に宗教的なテーマの詩で用いられるが、一部の詩では、昔使われていたような親愛を示す用法として使われていることが判明した。また、**you** が使われている詩の特徴の一つとして、手紙というテーマが見受けられることを示した。

今後の課題としては、以下の事柄が挙げられる。

- **you** が中心となって構成されているトピック 3 の更なる分析
- **you** を含む小規模なトピック 7 の分析
- **you** と **ah**, **thou** と **oh** が結びつきやすい原因の解明

参考文献

- [1] 荒木一雄, 宇賀治正朋. 英語学大系 10 英語史 3A. 大修館書店, 1984.
- [2] Blei, D. M., Ng, A. Y., and Jordan, M. I. Latent dirichlet allocation. *J. Mach. Learn. Res.* 3, 2003, p. 993–1022.
- [3] Finnerty, Páraic. *Emily Dickinson's Shakespeare*. University of Massachusetts Press, 2008.
- [4] 家入葉子. ベーシック英語史. ひつじ書房, 2007.
- [5] 岩田具治. 機械学習プロフェッショナルシリーズ トピックモデル. 講談社, 2015.
- [6] Johnson, Thomas H. ed. *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Little Brown and Company, 1960.
- [7] Navarro-Colorado, Borja. On Poetic Topic Modeling: Extracting Themes and Motifs From a Corpus of Spanish Poetry. *Frontiers in Digital Humanities*. 2018, <https://www.frontiersin.org/articles/10.3389/fdigh.2018.00015/full>. (参照 2019-01-12).
- [8] 武田雅子. エミリの窓から. 蜂書房, 1988.
- [9] 谷川俊太郎. マザー・グース 1. 講談社, 1984.
- [10] 谷岡清男. 愛と孤独と—エミリー・ディキンソン詩集 I—. 精興社, 1987.
- [11] 富樫剛他. イギリス文学入門. 三修社, 2014.

But then His House — is but a Step — / And Mine's — in Heaven — **You** see.